2018年7月15日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　　　**「箴言：賢い妻」**

聖書箇所：箴言　31:10-31

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は箴言から学びます。日本語で箴言というのは「教訓の意をもつ短い句。戒めとなる言葉」と言う意味で、格言集と言って良いでしょう。英語聖書では「Proverbs」と言いますが同じ意味です。ヘブル語聖書でも「mishle:」と言い、これは格言と言う意味の「ma:shal」の複数形です。この言葉の本来の意味は「類比」という意味で、自然や社会での出来事から類比によって教訓を引出し、格言になって行ったことからこの意味をもつようになったのでしょう。1:1に「イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言」とありますので伝統的にイスラエルの第三代目の王ソロモンの述べたもの、と考えられてきました。箴言30章はアグルという人物、31章の最初の部分はレムエルという王の言葉であると書かれていますからソロモンの言葉ではありません。それ以外の所についての、言葉の使われ方等の研究から、ソロモンの言葉に基づく伝承は箴言の一部であろう、と推測されています。10:1から22:16までと25:1－29章の最後までは、ソロモン本人に遡ることができるのではないか、と言われています。14章の“知恵ある者と愚かな者”についての箴言など、中心的部分はソロモン伝承に由来している、と言えます。本日お読みいただいた「理想の妻」に関する箇所は箴言のまとめとして最終段階で追加された部分と推測されています。バビロン捕囚後のBC6c－5cころにまとめられた、と推定されています。ソロモンは「知恵者」「賢人」の代表格でしたから、このような所謂知恵文学についてはソロモンの名が冠せられるようになったのです。「伝道者の書」も知恵文学の一つですがこれも著者はソロモンと言い伝えられてきました。実は、我々の聖書には入っておりませんがカソリックの聖書には含まれている知恵の文書が二つあります。「外典」と言います。ひとつは「知恵の書」と言い、別名「ソロモンの知恵」と言います。1:1は「義を愛せよ、地を裁く者たちよ、良き心で主に想いめぐらし、純な心で主を追い求めよ」という格言で始まります。内容は「箴言」より神信仰について直接語っています。もうひとつの外典は「集会の書」と言い、別名「ベン・シラの知恵」と言います。ベンというのはヘブル語で息子の意味ですから「シラの子の知恵」ということです。シラの子でイエスという名の人物が知られていますので、この文書は「シラの子たるイエスの知恵」ということになります。この1:1は「知恵はすべて主よりきたり、主と共に永遠にある」で始まり、沢山の格言が含まれています。聖書の箴言から引用していると想像される部分も沢山あります。この外典の知恵書は聖書の箴言が成立したのち、BC3-2に成立したものではないか、と考えられています。実は、オリエントの世界にはこのような知恵書の伝統があり、かなり古くからエジプト、アラビヤ、バビロン、フェニキアにこのような文書があったと言われています。捕囚後のユダヤの賢者たちが、それまでにあったソロモンの伝承と国の滅亡の中で主なる神に立ち帰るための戒めをまとめ、知恵文学を作って行ったとみられます。正典聖書では「伝道者の書」と「箴言」、外典では「知恵の書」と「集会の書」です。

　箴言は多くのテーマを取り扱っていますので、そのなかからイスラエルの信仰を理解する上で有益と思われる箇所をいくつかお話しし、そのあと今日の聖書箇所の理想の妻のところに行きます。まず1:7です。「主を恐れることは知識の初めである。 愚か者は知恵と訓戒をさげすむ」この「恐れる」と言う言葉は「ir-a:」という動詞で、旧約聖書で330回出てくる言葉です。大部分は恐怖の「恐れ」を意味します。旧約聖書の神様を恐ろしい神様というイメージを和らげるために畏敬（いけい）の意味の「畏れる」の意味で理解しようと言う傾向がありますが、間違いではありませんが、根本には「恐怖すべき神」というのが厳として存在することを忘れてはいけません。人間を震え上がらせる恐るべき力を示す神である、ということです。その神の恵みであり、慈しみであり、いとおしみであり、「愛」なのです。無条件での無限抱擁の仏とは異なります。その神を恐れるなかで、神の創造物を見て、この世の理（ことわり）を知っていくのだ、と言っています。

　次に6:20をお読みします。「わが子よ。あなたの父の命令を守れ。 あなたの母の教えを捨てるな」とあります。1:8にも同様の言葉があります。「わが子よ。あなたの父の訓戒に聞き従え。 あなたの母の教えを捨ててはならない」と言われています。ここで申し上げたいことは母の役割を大変強調していることです。父は命令者、母が教育者というような表現になっています。実は旧約聖書のみならず、古代メソポタミアにおける伝統は息子についてはもっぱら父親が各種役割を果たすのであって、母が登場することはありません。息子の教育の役割は当然父親の責任です。創世記をみてもこのことははっきりしています。これに対し、この箴言に流れている思想は女性を極めて高く評価していることが特徴です。箴言の最後が「賢い妻」を讃える歌である点はこのことを象徴していますが、箴言の一つ一つの格言のなかにも現れています。このことの関連で現代のイスラエルにおいてユダヤ人の定義は「母がユダヤ人」である、ということである点が思い起こされます。原始社会における母系社会というのは子供の親を判定するのに生んだ人間即ち母親で判断するのが間違いがない、ことから成立した制度ですが、ユダヤ人判定基準としての「母がユダヤ人」ということは、信仰の継承が第一次的には母の役割である、ということを意味しています。父親は戦争や権力闘争に明け暮れ、子供への信仰継承の役割を満足に果たせなくなっていたのかもしれません。母親は定められた祭りの準備をし、イスラエルの歴史の中で働く主なる神を讃える伝統を家庭のなかで保持する役割を果たすようになっていった、と思われます。母親の感化で牧師の道を選んだ、という人が今でも多いのもその流れかもしれません。

　14:21を見てください。「自分の隣人をさげすむ人は罪人。 貧しい者をあわれむ人は幸いだ」とあります。注目は後半の「貧しい者」です。この「貧しい者」というのはヘブル語では「a:naw」という単語であり、ギリシャ語訳では「ptwxos」という言葉です。ヘブル語の「a:naw」と言う言葉は謙遜という意味もあり所謂貧乏とは違います。清貧な、というような意味です。ギリシャ語の方は貧乏に近い「貧しい者」です。マタイ5:3の「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」における「貧しい」はどうでしょうか。ギリシャ語は箴言と同じ、「ptwxos」です。新約聖書のヘブル語訳というのをみると、この「貧しい」のヘブル語はやはり箴言14:21と同様「a:naw」です。ヘブル語の場合文字通り貧しい、即ち貧乏の意味の「ru:sh」という単語も別にありますので、新約聖書のベブル語訳をした人はこの貧しいは単に貧乏というだけでなく、神の前での謙遜さを持っている、という意味も込めている、と推測されます。いずれにせよ、箴言14:11がマタイ福音書5:3に繋がっている、と見ることができます。箴言で「貧しい者をあわれむ人は幸いだ」と言われていたのがイエス様の言葉では「心の貧しい者は幸いです」となっているのです。ルカ福音書6:20平地の説教における「貧しい者は幸いです」の「貧しい」もギリシャ語、ヘブル語とも同じです。このように「貧しき人々」に対する神の憐みは箴言のあちこちに現れています。19:1には「貧しくても、誠実に歩む者は、 曲がったことを言う愚かな者にまさる」と言われています。それが新約聖書では更に強調され、「貧しい者」にこそ神の恵みが示され、祝福に与る、即ち、精神的・物質的に豊かにされる、と言っています。逆に金持ちについてはさんざん、なことはご承知の通りです。箴言では「貧しき」人々に憐みを示すことがイスラエルの民に求められていますが新約の世界では神様が貧しい人々に直接憐みを示される、ということです。この福音書でも御言葉は旧約における貧しき者への憐みの伝統の上にあることが理解いただける、と思います。

　「賢い妻」のところに行く前に、いろいろな表現で箴言に登場する「知恵」という言葉をみて旧約・新約における「知恵」の理解を概略見ておきたい、と思います。まず箴言1:2に「知恵」という言葉が出てきます。ヘブル語では「hakma:」、ギリシャ語では「sofia」です。ヘブル語の「hakma:」は派生語を含めると旧約聖書で300回以上登場する言葉で「知恵」「賢者」「熟練の」というように訳されます。「知恵」の代表的言葉です。ギリシャ語の「sofia」は哲学・phylosophyの「sophy」の原語です。こちらもギリシャ語「知恵」の代表的な言葉です。やはり、1:2に「悟り」という言葉があります。これはヘブル語で「bi:na:」の訳です。これは日本語での「悟り」によって推測されるように深い真実を知ることです。「悟り」は仏教用語ですが語感がよく表れています。1:3に「思慮ある」という言葉が出てきます。ヘブル語では「sa:kal」であり、良く理解する、という意味です。人生の真実を理解する、というよりは、この世の出来事の背後にある法則のようなものを良く知っている、という意味です。ダニエル書11:33に「maski:l」という言葉が出てきます。「sa:kal」の複数形分詞です。これは「思慮深い人たち」と訳されていますが、聖書に精通し、イスラエルの信仰を継承していった賢い人々即ち賢者集団をさしている、と推測されています。聖書文書に追加するなどし、信仰文書を発展させていった人たちです。このような人々が1:2で言う「思慮ある人々」です。1:4に「若い者に知識と思慮を得させる」という表現がでてきますが、この「知識」はヘブル語で「da:at」と言う言葉です。1:7に先ほどの「主を恐れることは知識の始めである」がありますが、この「知識」も「da:at」です。ギリシャ語の方は種々の言葉が使われています。知恵と同様の「sofia」が使われているケースが多いようです。しかし、新約で「知識」と言う訳はほぼ完全に「gnwsis」という言葉です。グノーシス派というのを聞いたことがあるかもしれませんが、新約の時代の異端で、神より知識を頂いた「知者」を指導者として従って行けば救われる、という派です。コリント人への手紙の背景にこの派が教会内で勢力を持ってきていたのではないか、という説が有力です。その後、中世においても神から言葉を預かったと称する人物が現れ、教会と対決しました。この知識が「gnwsis」です。ヘブル語の「da:at」もギリシャ語の「gnwshis」も知恵というより知識です。しかし、現代の知識のようにいろんなことを良く知っている、という知識ではなく「人生かくあるべし」というようなことに精通している、ということです。「知者」と言う時の知識です。これら「知恵」関連の言葉を新約に広げていきますと、先程ヘブル語で「sa:kal」と言いました「思慮深い」のギリシャ語は「frone:o」が対応のギリシャ語であることが解ります。また新約聖書で「知性」を調べると、ギリシャ語では「nu:s」という心とか洞察という意味の言葉が充てられますがヘブル語では「思慮」の所で出てきた「sa:kal」が充てられています。以上、全体としてはみると、「知恵」「hakama:」「sofia」の流れ、「知識」「da:at」「gnwsis」の流れ、「思慮」「洞察」「sa:kal」「frone:o」「nu:s」の流れ、の3つの流れを見ることができます。箴言にはこの3種の言葉がかなり使われています。新改訳聖書はちゃんと訳し分けられているようです。

　「箴言」から新約聖書を通して、「知恵・hakma:」はほぼ同一の意味を確保しています。単なる知識とか理性的な哲学概念とかではなく、この世で信仰者として生きていくための洞察のようなもののことを言っています。従って、知恵者というのもこのような洞察力を備えた経験豊かな人のことを指しています。旧約ではこの知恵は大体、良い意味で使われています。新約でも、基本的には神の理（ことわり）に通じている、という意味で使われており、積極的意味合いです。しかし、パウロはその言葉を消極的な意味にも使っています。第一コリント書1:22で「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。」と言っています。これはギリシャ人が知恵を求めるがゆえに、主イエスの福音を受け入れることができない、ということを言っているのです。「知恵」がじゃまして単純な福音を受け入れられない、というのです。これは「信仰と知解」の問題として、信仰が先か、理解が先か、というようなテーマで昔から議論されてきました。われわれキリスト者においては信仰が先に決まっている、と言いますが、では知的理解は信仰を高めるのでしょうか、低めるものなのでしょうか、という問いで考えるとそう簡単に答えられるものでもありません。新約の時代においては「知恵」が両刃の刃（やいば）のような意味を持ってきていることは肝に銘じておくべきです。いろいろ学び、真剣に考え、祈って行く中で、単純な聖書の言葉に行き着くことがあります。それが真実なように思います。

新約聖書ではローマ書、コリント書等パウロの手紙で「知恵」とその類語がかなり使われています。「思慮」だけはエペソ1:8、テトス2:6、黙示13:18の3箇所だけです。黙示録13:18では「思慮ある者」というのが出てきます。これは、ギリシャ語は「nu:s」で、ダニエル書の「思慮深い人たち」と単語は違っていますが、意味は通じているように思われます。黙示録は新約におけるダニエル書とも言える書物ですから、指しているのは同一の人々かもしれません。これまで単語の繋がりを見てきましたが箴言と新約聖書とが深いつながりを持っていることが解ります。箴言はユダヤ人の中ではみんながよく知っていた書物ですから、当然の事かもしれません。

　では本日の聖書箇所の「賢い妻」のところを見てみます。この部分は非常に技巧的に創られた詩である点を最初に申し上げておきます。この31:10から各節の最初の文字がアルファベット順になっているのです。ヘブル語のアルファベットは「アーレフ、ベート、ギンメル、ダーレット」と繋がりますが、10節以下の最初の単語は「e:shet、ba:ta:、gemalate:hu、da:rsha:」となっています。31節がアルファベットの最後のタウで「tenu:」という単語が使われています。このようなアルファベット歌のような箇所はいくつかあります。中でも有名なのは詩編119篇です。最初の8節の最初の単語の最初の文字はすべてアーレフです。以下ベート、ギンメル、ダーレットと8節づつ続いていきます。その他哀歌にもあります。

さて本文に入ります。最初は前書きとでも言える箇所で31:10-12です。「しっかりした妻をだれが見つけることができよう。 彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。/ 夫の心は彼女を信頼し、 彼は 「収益」 に欠けることがない。/彼女は生きながらえている間、 夫に良いことをし、悪いことをしない」とあります。最初の「しっかりした」はヘブル語で「有能」とか「力強い」という意味です。「軍隊」という意味もあります。従ってここに登場する女性はいろいろなことをできる能力をもった力強い女性であり「肝っ玉母さん」のような人でしょう。この「しっかりした」のヘブル語は「hai:l」という言葉ですが、口語訳では「賢い」であり、共同訳では「有能な」です。伝統的に口語訳の訳で、この箇所は「賢い妻」と呼ばれてきましたので、お話しのタイトルは「賢い妻」と致しました。

11節で「夫は「収益」に欠けることがない」と言われています。夫に利益になるようなことを持ってくる、という訳です。この夫は左団扇なのかもしれません。次に彼女の働き方です。31:13-15です。「彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、 喜んで自分の手でそれを仕上げる。/彼女は商人の舟のように、 遠い所から食糧を運んで来る。/彼女は夜明け前に起き、家の者に食事を整え、召使いの女たちに用事を言いつける。」とあります。「遠いところから食料を運んでくる」と言われています。これは本来男の甲斐性の話なのですが、この妻は自分の内で取れた者を市場にもってきて売ってそのお金で食料を買ってくるのかもしれません。いずれにせよ、たくましい女性です。

次は自分の家での働きです。31:16-18です。「彼女は畑をよく調べて、それを手に入れ、 自分がかせいで、ぶどう畑を作り、/腰に帯を強く引き締め、 勇ましく腕をふるう。/彼女は収入がよいのを味わい、 そのともしびは夜になっても消えない」とあります。「そのともしびは夜になっても消えない」とありますので「母さんは夜なべをして」編み物をしているのかもしれません。彼女の家は町でも評判の家のようです。

19-24では「彼女は糸取り棒に手を差し伸べ、 手に糸巻きをつかむ。/彼女は悩んでいる人に手を差し出し、 貧しい者に手を差し伸べる。/彼女は家の者のために雪を恐れない。 家の者はみな、あわせの着物を着ているからだ。/彼女は自分のための敷き物を作り、 彼女の着物は亜麻布と紫色の撚り糸でできている。/夫は町囲みのうちで人々によく知られ、 土地の長老たちとともに座に着く。/彼女は亜麻布の着物を作って、売り、 帯を作って、商人に渡す」と言われています。「悩んでいる人に手を差し出し、 貧しい者に手を差し伸べる」のは主なる神に忠実な人の必須条件です。ギリシャ語は先ほどの「ptwkos」で同じですが、ヘブル語は「ebyo:n」という単語であり、文字通りの貧乏という言葉です。助けを必要としている人、という意味合いもあることばです。要するの彼女は困っている人を助けてあげる人だ、というのです。

ついで25-27です。ここは彼女の品性について述べています。「彼女は力と気品を身につけ、 ほほえみながら後の日を待つ。/彼女は口を開いて知恵深く語り、 その舌には恵みのおしえがある。/彼女は家族の様子をよく見張り、 怠惰のパンを食べない」とあります。素晴らしい表現です。

25節をもう一度読みます。「彼女は力と気品を身につけ、 ほほえみながら後の日を待つ」。口語訳では「力と気品とは彼女の着物である、そして後の日を笑っている」です。フランシスコ会訳では「彼女は力と気品を身に着け、明日の事を考えて、微笑んでいる」となっています。ここでの「力」は「神の力」という言い方で使われることもある「o:z」という言葉です。「気品」と訳されているのは「ha:da:r」という言葉ですが「神の栄光」の「栄光」にも使われる言葉です。最高の賛辞と言って良いでしょう。

最後はまとめになりますが28-31です。「その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言い、 夫も彼女をほめたたえて言う。/「しっかりしたことをする女は多いけれど、 あなたはそのすべてにまさっている」と。/麗しさはいつわり。 美しさはむなしい。 しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。/彼女の手でかせいだ実を彼女に与え、 彼女のしたことを町囲みのうちでほめたたえよ」と言われています。「麗しさ」と訳されている言葉は「チャーミング」というような意味のようです。「美しさはむなしい」のむなしい、は伝道者の書で「空の空」と言われている「hebel」です。この箇所はあまり深刻に採らずに「特別チャーミングと言う訳でも所謂美人という訳ではないが」というくらいでしょう。力点はここにはなく、この女性の素晴らしさを家族中で、町中でほめたたえていることです。この「ほめたたえよ」は「ハレルヤ」の「ha:lal」という動詞です。最後はハレルヤで終えているのです。

　すごい賛辞の言葉が並んだ女性です。今でも世界の男性が理想とする妻でしょう。これが知恵書のひとつ箴言の最後の部分に存在するのです。実は、最初にもうしあげた、知恵書のひとつ「ベン・シラの知恵」の26章がやはり「良い妻」を讃える詩になっています。箴言と異なり、「悪妻」についての箴言も含んでいます。例えば26:6「心を痛ませる悩みの種は、／夫をめぐる女どうしの嫉妬。その舌のもたらす災いはすべての人に及ぶ。」、26:9「身持ちの悪い女はみだらな目と、／流し目でそれと分かる。」というような調子です。しかし、基本は「良い妻」への大賛辞です。26:15-16「しとやかな妻は優しさにあふれ、／彼女の慎みは計り知れないほど貴重なものだ。/主のおられるいと高き天に輝く太陽のように、／よく整えられた家にいる妻は美しい。」とあります。著作年代はBC190頃と考えられていますので、正典の「箴言」の影響を受けて書かれた文書と考えられます。「箴言」に戻ると、この「賢い妻」が最後のところにある、ということはこの「賢い妻」が「知恵書」のまとめとして適当である、と著者は考えたのでしょう。この部分は、女性の方から見れば、まさに男の都合の良い理想像を描いている、と考えられるでしょうが、むしろ、イスラエルの知恵とはこのようなものだ、という見地から読むべきものと思われます。イスラエルの知恵はギリシャ哲学のような深淵さはありませんが、主なる神の恵みの下で、自らに与えられた使命と責任をひたすら果たす姿にこそある、ことを知らされます。